



AMDА GPSP (Global Partnership for Sustainable Peace: 世界平和パートナーシップ) クアラルンプール事務所長
岡山大学法学部(夜間主コース)卒/社会文化科学研究科修士課程修了

大政 朋子

O M A S A T o m o k o

岡山を拠点に、世界で活躍する国際医療ボランティア「AMDА」。大政さんは、その一員としてマレーシアの事務所に勤務している。岡山大の大学院生だった彼女が、世界に飛び立つきっかけになったのは、1通のメールだった。



◀東南アジア洪水緊急救援活動で物資を配布する大政さん
 =1月、クアラルンプール

- ▶おおまさ ともこ (42歳)
- 1972(昭和47)年 スイス生まれ
- 2008(平成20)年 岡山大学法学部(夜間主コース)卒
- 2011(平成23)年 岡山大学大学院社会文化科学研究科修士課程修了
- 2011(平成23)年 AMDAに就職 東北事業担当に
- 2014(平成26)年 AMDA GPSP クアラルンプール事務所長

1通のメール

「私にも何かお手伝いできることはありませんか?」

東日本大震災が発生した2011年3月11日。居ても立っても居られず、AMDА本部にメールを送っていました。およそ1分後に来た返信には、こうありました。

「明日、被災地に行ってください」。当時、私は国際法を研究する大学院生。国際医療ボランティアとして世界で活躍するAMDАを修士論文のテーマにしており、インターシップ生としてお世話になっていました。支援活動をした経験はありませんでしたが、翌朝には被災地に向けて出発。「自分には何ができるのだろう」と、不安な気持ちもありました。

「日本だけでいいの?」

以前は、保育士として児童養護施設で働いていました。虐待を受けた子どもの親権問題にジレンマを感じ、「法律の根本を学ばなければ子どもは守れない」と、退職して法学部に入學しました。

国際法の講義は、世界に目を向けるきっかけになりました。それまではテレビから聞こえてくる「紛争」「内戦」といった言葉に、「遠いよその国の出

来事」といった印象を持っていましたが、講義では他国の現状を生々しく知ることができました。何より担当していた先生に「日本の子どもだけではないの?」と問われ、はっとさせられました。

東北に戻りたい

東日本大震災の被災地では、現地医療機関からの協力要請や情報を収集するなどしましたが、わずか5日間で帰ることになりました。福島第一原発事故による放射性物質の拡散が懸念され、支援体制を縮小せざるを得なくなったのです。岡山に戻った時、「やり遂げられなかった」という気持ちでいっぱいでした。現地の状況を目の当たりにして、このまま引き下がることはできませんでした。岡山の家を引き払い、4月からAMDАの東北事業担当の職員として、一人で再び被災地に戻りました。

被災地をつなげる

東北に戻ってからは、さまざまな支援を行いました。その一つとして、岩手、宮城、福島の3県がご当地グルメを振る舞うイベント「復興グルメF1大会」があります。支援活動を通して、「被災地同士をつなげたい」と思い、企画しました。

当時、福島県は風評被害がひどく、イベントへの参加に消極的でしたが、同県南相馬市が手を挙げてくれました。岩手、宮城県のチー

ムも、どうすれば福島のブースにたくさんの方が来てくれるかを親身に考え、放射能の検査データを表示するといったアイデアを出しました。

当日、福島のブースには長蛇の列ができ、メニューは完売。南相馬市の出店者はもちろん、岩手、宮城の皆さんも、自分たちのことのように喜んでくれたのが、強心に残っています。

若者に世界を見せる

昨年9月からマレーシアのGPSPPクアラルンプール事務所に配属されました。昨年末には、同国北部で深刻な洪水被害があり、現地のNGOと一緒に、清掃道具を物資提供したり、巡回診療をするなどしました。

同事務所では、国際社会で活躍する若者を育てる「グローバル人材育成プログラム」を来年度からスタートさせるため、準備をしています。対象は大学生で、自身で体験プランを考え、AMDАの海外支部や連携機関で活動。海外で活躍する日本人や、異なる人種の人々と出会うことで、若者に世界を見るチャンスを提供できればと思っています。

AMDАに送った1通のメールが、私の大きな転機になりました。小さなことでもアクションを起こさなければ、何も変わりません。若い人たちにも、その一歩を踏み出してもらいたいです。

小さなアクションが 大きな一歩に

■ AMDA

所在地：岡山市北区伊福町
事業内容：緊急人道支援

国際医療ボランティアとして、災害や紛争発生時、医療・保健衛生分野を中心に緊急人道支援活動を展開。世界30カ国にある支部のネットワークを活かし、多国籍医師団を結成して実施している。